

# 經濟論叢

第九十三卷 第五號

---

海上運賃變動の特質……………山 田 浩 之 1

經濟学史に関する最近の見解……………出 口 勇 藏 24

設備投資函数の計量分析……………真 繼 隆 51

---

昭和三十九年五月

京都大學經濟學會

## 經濟学史に關する最近の見解

——經濟学史研究の現代的意義(三)——

出口 勇 蔵

### 六二つの補論

これまでにのべたのは、經濟学の研究部門の分類の仕方からみた經濟学史の位置、經濟学史の本質、課題と方法とから規定される学史の類型、および現代の經濟学史において展開せらるべき内容の一般などであった。わたくしとしては、およそこれぐらいのことについて私見を吐露することによって、經濟学史研究の現代的意義はおのずとあきらかになるだろうと、考えているのである。しかしこれまでの叙述をふりかえってみると、わたくしの考えようとする方向はあるいははっきりしたかもしれないが、現代の經濟学史の研究がせ負っている課題がどうして果たされるのやら、学史の展開の内容がこれまでとどう変わることになるのやら、はっきりせぬままに述べおえた形になつてしまつた。それを明らかにすることは、わたくし自身の学史研究によつて具体的に示めされるはずであるが、抽象論議としてもまだ展開される必要がある。このことはわたくしの十分に承知しているところである。しかしこのたびは、ともかくこの程度で自説の積極的な展開を打ち切りたいと思う。最後に、すでに気づいている若干の補

説をおこない、あわせて、現代の、とくにわが国の、諸家の見解にたいする私見をのべることによって、白説の足りないところをおぎなうことにしたい。

まず、わたくしが経済学の形成における二つの次元としてのべたことについて、つぎの補いをしておく。上述の二つの次元は論理的な順序としてあるものであって、それらがつねに歴史的にも、二つのわかれた姿をとってあらわれるというのではない。たとえば、古典学派の立場が確立すると、経済学の体系がととのい、そのあとではじめて、古典学派の立場からする経済学史や方法論などが経済学の体系とは別に、あるいは別の人によって、展開せられる、などというのではない。こんなに悟性的な解釈をされると、真実は遠ざかってしまう。真実は、第一次元と第二次元とが重なり合いながら経済学を形成するところにある。二つの次元のこの重なり合いについて簡単に説明しておこう。

第一次の形成がなつて以後、つまり古典学派の類型がスミスによつてでき上がつてからのことを考えると、経済学史だけではなく、経済学の個々の理論は、現実の経済生活のなまの経験だけを基にして反省するばあい——この態度の重要性について注意をうながすことは大へん必要である——のほかは、大なり小なり、過去の理論や命題との関係において、展開せられることが一般的である。とくに経済理論や経済学上の命題がイデオロギーの構成要素となると——これについては第二の補説としてすぐつぎに論じる——、以前の学派の理論や命題は、ただ科学や思想の領域で市民権をもつただけでなく、またそれらが一般人の理解するところにもで普及することによつて、濃淡さまざまな誤解をまじえながらも、日常用語になるということだけでもなく、さらに、階級的利害をば反映しながら超階級的なひろい妥当性をもつ理論や命題であるかのように、とりあつかわれ、したがって階級闘争の武器の一部

に転化するから、過去の經濟学との対決は、理論的にも実践的にも、緊急の要務となつてこなくてはならない。そこで、經濟学の第一次的形成そのことのためにも、第二次的形成である部分が必要で欠くことをえないものとなるのである。そののみか、歴史的な学派の消長交代を調べるならば、新しい立場と称するものが、自分の新説の積極的な展開をこころみるよりも、むしろ旧説の欠陥を暴露し消極的な批判をおこなうことに熱を入れたということすら、あるほどである。つまり、ここでは、經濟学の第一次的形成の中に第二次的形成が混入しており、その混入の中から、あたらしい第一次形成がみろうとする。過去の經濟学の批判的検討を通して、あたらしい經濟学は芽ばえるのである。

この過程にもさまざまな型がある。上に論じたところを記憶され、その理路をたどつて考えようとする読者ならおそらくは予期されるであらうけれども、この型について若干の言葉を足しておこう。

まず過去の經濟学の体系を一つとして、つまりその「一」という性格において批判することを通して、新しい立場を主張することがある。いわば總括的な批判であり、学派の立つ根本的な立場の批判である。つぎに旧い經濟学説をその「多」という性格において批判することによって、理論的な批判、歴史記述上の批判、および政策論的な批判が成り立つ。——このように、あわせて四種の類型の批判を通して新説の提出がおこなわれることになる。

たとえば歴史学派の古典学派にたいする批判をば思い出していただくといふ。そうすれば、總括的な批判も、理論的な批判も、歴史記述上の批判も、また政策論的な批判も、そのいづれも、読者の脳裏によみがえることであろう。機械論ないし原子論にたいする有機体説の主張は第一の種類の批判であり、労働価値説にたいする生産費説による修正は第二の、古典学派の重商主義論にたいする政治主義的な弁護論は第三の、そして自由貿易論を排する保護貿

易論の主張は第四の種類の批判でなくてはなるまい。こういう形で、第一次的形成のなかに、第二次の形成の内容となるべきものが入りこんでくる。つまり、経済理論や経済史や経済政策の展開それ自体のなかに、経済理論史や経済史研究史や経済政策論史の批判的検討のプロセスが姿をあらわすのである。われわれのテーマに限ってくりかえしていうと、経済理論の自己展開のなかには、明示されると暗示されとの差はあり、または故意にかくそうとするばあいがあっても、経済理論史の展開がみられるのである。そのばあい、経済理論史の叙述は、理論の展開それ自体が主な目的であるにたいして、従属的な意味をもつと考えることもできる。理論史の叙述の部分は、『資本論』第一巻の中からゆたかな例証がとり出せるように、本文の註の中に収めることも可能であるからである。この考えをすすめてゆくと、理論史は、したがって経済学史の叙述というものは、理論の叙述をサシミとすればそれに盛りあわされたツマの役割をはたすとも考えられる。この叙述についての関係はまた研究についての関係でもあると思われ、経済学史の研究は経済理論の研究をサシミとするそのツマにほかならず、結局、経済学史の研究の意義は経済理論の研究に従属するものと解せられることになるのである。この考えについては、後に再びとり上げられよう。

歴史学派の立場について上にのべたことがマルクス経済学についても全く同じようにあてはまることは、すでに例証として出したところからも明らかであるが、二つの次元が混り合うという事態は、実をいえば、古典学派において第一次の形成が成ったと考えられてから以後においてはじめてみられる、というものではないのである。第一次の形成がはじめておこなわれたときにも、すでに第二次の形成が重なり合っておこっている。そのいちじるしい例として、スミスの体系叙述——第一次的形成の展開——の中に、重商主義や重農主義の批判がみられることを指

摘すれば、ひとびとの理解がえられることであろうと思う。つまり、そこでもまた、第二次の形成の契機が第一次の形成の中に混入しているのである。

この混入の事實は見おとすべきでない。では、この混入はどうして生じるのか。あるいはどうして生じなくてはならぬものであるのか。わたくしの考えでは、それはある事實またはある意識の内容とそれにたいする研究者の意識と（つまり批判的意識）との關係というものに還元することができると思う。このことを經濟学体系の構成部分である「多」的要素について説明すると、次のようになる。まず理論における上の混入とは、古い、あるいはその時の他の人の、理論や命題と考えられるものと、研究者の批判的意識の中にある理論や命題との混入のことである。歴史における混入とは、過去の事実とその事實に關する研究者の批判的意識との混入である。政策における混入とは、過去の政策の事實や実践的命題とそれらに關する研究者の批判的意識との混入である。これらのいづれの部分にせよ、この混入によって、研究者の批判的意識（科学的意識）は、以前の、または他の人の見解との異同をしめすことによつて、自分にも他人にも明瞭に自分を表現しようとするのである。だからここにいう混入の事實は、すなわち第一次の形成の中に第二次の形成の要素が混入するということは、実は対決にはかならない、ということがわかる。そしてこの対決とは、古いもの、他人のものに対して研究者がいとむところの対決であるにほかならない。例えばマルクスは自分の労働価値説の立場でもつて、スミスの労働価値論の不徹底とそのブルジョア的限界と対決したのであり、スミスは重商主義や重農主義の實踐的命題をむこうにまわして、自分の自由放任思想との対決をはかったのである。

この対決について注意しておきたいのは、研究者自身の理論的、實踐的命題がまず定まっている、ということが必

要であつて、それとの対決の材料として、過去の、または他人の理論や実践の命題がとり出されているということである。

このような対決的な構造をもちながら、ともかくも、第一次的形成のなかに第二次的形成の要素が混入しているということは、重要な事実である。そこでこの事実を重視する人には、二つの次元の区別は必ずしも意義がないのではないかと、考えられるかも知れない。そして経済学史という第二次的形成の内て生まれる研究部門は、経済理論なり経済政策の展開の中でその一部としてあらわれるのであるから、理論なり政策なりの研究の一部を構成すると、考えることにもなるだろう。実際にこんな考える人もあること、後に論じる通りであるが、しかしわたくしは、上の混入の中にみられる、過去の理論への論及をそのままで経済学史としては承認することはできず、むしろ、それは経済理論や経済政策の展開の中で利用される範囲においての経済学史の部分であると思うのである。経済学の形成における二つの次元の指摘は、この科学の認識の構造を明らかにするために、必要なひとつの論理的操作である。

さて、補説の第二は、経済学なり経済思想がイデオロギーに転化することによって生じる困難な問題についてである。

科学や哲学は、社会の現実的土台からいえば、上部構造の一部である。社会の現実的土台が階級的な構成をもつときには、その上部構造の中にもその構成は反映しなくてはならない。だから科学や哲学の内容の中にも、階級的な構成から生じる問題とその解決の仕方との特色が反映しないわけにはいかないのである。けれども、科学や哲学がその本性であるところの批判的認識の精神をばある程度以上に宿しているかぎり、それらには、ただ階級的であ

って社会の全体にたいする包括的な認識をふくまないという、特殊的な認識角度と認識内容とだけがあるというのではなくして、その制限をば自己批判的に越えて、社会の全体的認識でありえようとするし、またその程度についてはさきまであれ、社会の全体像を具えているといえるものである。その際、その認識の素性ともいふべき社会的限界が逆に活用せられて、社会の全体像がそれまでにえられなかった新鮮な角度から獲得されるということになるのである。興隆期のブルジョアジーの健全な科学的認識とはまさにそういう二重の構造をもつものだったのであり、この二重の構造——階級的に限定された角度からおこなわれる特殊的認識であると同時に、階級的限界を越えた社会全体に關する客観的認識であるという二重の構造——をもつ限りにおいて、近代社会の全体像は、以前の支配階級によってよりも、ブルジョアジーの手によっていつそう正しく具体的に見だめられたといえるのである。またプロレタリアートの階級的立場からブルジョアジーの科学にたいして批判的に認識を加えるときに、更にいつそう具体的で正しい社会の全体像が獲得されると、マルクスは正しく主張したのであった。

科学の認識は上の二重の構造をもつかぎりにおいて、客観的な真理をとらえる。とくに社会科学の認識は、この二重構造をそなえていることが対象の真実にせまる必要な条件である。この条件をそなえるかぎり、科学はイデオロギーではないのである。ところがこの二重の構造は、認識の主観の側の批判的精神がある程度以上に高まっているということによってのみ、そなわるものである。ここに主観の批判的精神と呼ぶものが何であるかは、くわしく論じる余裕はないけれども、これは主観の努力により自覚によってはじめて達成されるものであって、自然のままに放置するときには、その精神は緊張をうしない、上の二重構造はみられなくなり、その本来の社会的素性といふべき階級意識の限界の中に安住するという傾向をもつ。そしてそのとき、科学的認識もまたイデオロギーの一種に

転落するのである。<sup>2)</sup>

経済学においては、科学的認識とそのイデオロギーへの転落との関係は、経済的行動が階級的利害に由来することが大きいだけに、それだけ密接であり、ある学派の認識にしても、それが科学的認識として経済的実在に関する真理を語るばあいと、イデオロギーとして、階級的利害を表現し虚偽を語っているにすぎないばあいがある。だから、経済学史を考察するばあいにも、経済学の認識のこの二様の性格についてふかい注意をはらう必要がある。ある意味では、経済学の認識の、階級的素性とその制限の突破による科学性の獲得と、さらに階級的制限への墮落によるイデオロギー化という推移の歴史的な追及こそ、経済学史上の一学派に関する認識の内容をなす、そして古い学派の科学的認識のイデオロギー化と、あたらしい階級的立場によって獲得される新鮮な科学的認識による、古いイデオロギーの克服の過程が、経済学史の認識の重要な部分となる、とさえいことができる。

経済学史の現代的意義について論じながら、この点について十分な考察を加えなかったことは、わたくしの欠陥であった。わたくしがこの学科の現代の段階をば、社会主義と名づけようとする、ある人には突飛とも思える意図も、この点を詳しく論じることによって、理解されるであらう。<sup>3)</sup>

(1) 歴史の本質として、Geschehen と Historia との両者が統一されているということは昔からよくいわれることであって、これはわたくしがカーを援用して述べた、過去と現在との対話という歴史の本質的事実をば、見方をかえていいあらわしたものにすぎないが、このばあいには、Geschehen とは過去の事実そのものを、Historie とはそれに関する研究者の意識をさしている。

(2) 科学は上部構造の一種であるが、その本性においては対象にたいする全体的な真理をとらえるものであって、社会的な制限に由来する限界をもつことを本性とする、イデオロギーではない、科学は真実の意識の産物の一種であるが、イデオロギーを生むものは虚偽の意識である。社会科学のばあいには、社会的な制限に由来する限界というのは、その認識の階級的な性格の

ことであり、その階級的な限界とそれを越えた社会全体に關する真理との二重構造が、他の科学よりも明白に生じるのである。階級社会における社会科学では、その階級的素性なしには認識は成立しないが、その素性に忠実であるかぎりにおいての認識には、制限された真実しか反映せず、社会の全体的眞実は突のらない。全体的眞実に達するためには、認識の主観の側の絶えざる努力による、批判的精神の錬磨と社会的・歴史的な自覚が必要である。そしてその自覺的な努力がともなわねときには、全体的眞実から遠ざかつて、階級的な制限を脱しえぬ一面的な眞実、つまりそのかぎりでの虚偽が語られることになる。そのとき、社会科学の認識はイデオロギーに転落する。

(3) わたくしが階級性について書かなかつたのには、若干の理由がなくもない。それは、一九世紀とちがつて、現代ではこの問題ははるかに複雑なすがたを現わしてきているから、ただこの論点をば古典的なかたちで提示するだけでは、問題の現代的な状況をしめしえないばかりか、あやまつた解決にみちびくおそれがあると、思われるからである。現代では、階級性は、一面では、古典的な分析のしめすところにしたがつて一層あきらかにあらわれているものの、他面では、一九世紀にはあまり重要な役割をしめさなかつた民族性や人種性などの基本的な社会集団が階級とからみついているから、知識の社会的存在による拘束、限定はよほど複雑なものになつてきている。このようなときに、古典的な階級性論をのみおこなうことは、そのこと自身、科学的認識ではなくてひとつのイデオロギーを語ることにはかならない。議論のイデオロギー化を警戒する心がわたくしに上の論点怪視のあやまりをおかしたものであつた。

## 七 諸家の見解について

さてこの小論の最後に、内外の経済学史の研究者たちがしめしているさまざまの見解にたいして私見をのべることは、わたくし自身の見解を補充的に説明することにもなるうし、また学界にたいして儀礼をつくすことになるだろう。わたくしの言葉が時にエチケットにはずれることがあるかも知れず、また取り上げる順序が不同であつて学界の礼を欠くとのそしりを受けることもあるべきにたいし、あらかじめおゆるしを求めておく。

まず、宇野弘藏氏の意見をきこう。氏は若い研究者たちとの対談のかたが書かれた『経済学の方法』（一九六三）の中で、「宇野理論」から生まれる必然的な帰結の一部として、経済学史について簡明直サイにのべている。それによると、経済学史とは「マルクスの『資本論』を準備するものとして経済学の歴史」、あるいは宇野氏によると『資本論』は原理論的に完成したものとはいえないにしろ、完成の基礎を与えてくれたものだから、その「原理論の体系化の歴史」である、といわれる。つまり宇野氏の見解では、経済学史とはその対象からみても、『資本論』の成立までをとりあつかうのであり、それ以後の経済学の歴史はそこにははいらなくなるのである。

こういう立場にたいして、わたくしは思う。第一に、『資本論』に展開されている諸理論の体系をば歴史の大海の中に沈めて、そこからその体系の歴史性と超歴史的な理論的価値をとり上げることこそが経済学史の課題であって、それをば中空に置いてはならない、と。『資本論』の第一巻が出版されてすでに百年を迎えようとし、その年に行われる学界の記念行事が議せられつつありもするものに、こういう超歴史的なとり扱いがなされようとは奇怪というほかはない。ましてや原理論がその書物において十分に展開されなかったとするならば、それを究めることこそ正しく歴史的な課題ではないのであるか。第二に、経済学の体系は理論だけから成るものではない。歴史学派の立場は、理論においては幼稚であつたにしろ、歴史的認識と政策的認識とにおいては、独特の価値のある——これは批判の余地のないという意味をこめていうのではない、正に反対だ——業績をのこしたのであり、この業績をば評価しうるようでなくては、経済学史は職責をはたしたということとはできない。第三に、産業資本の時代の経済構造を明らかにする理論の形成史だけが学史なのであるから、それ以後の時代の経済学は、宇野氏においては、歴史の領域に入ることができないが、これでは経済学の歴史を正当にあつかうことにはならないであらう。もし資

本主義社会が発展するというのなら、その真理もまた発展するのでなくてはならず、独占資本の段階において、産業資本の段階の真理を踏まえた一そう具体的な構造をもつ真理が表現されているといわねばなるまい。誤解されないために書きそえておくが、ここにいつそう具体的な真理というのは批判の余地のすくない真理という意味ではない。独占資本の時代においては、人間の疎外は産業資本の時代よりも質的にはなだしくなること、いうまでもない。しかしそこに、社会変革の可能性もまた強まってくるのであり、この意味において、具体的真理に近づくといえるのである。第四に、これが基本的に大切だと思うのだが、資本主義の経済組織の真実は、ヘーゲル風に、あるいは弁証法的にいえば、社会主義の経済組織の中にみられる。経済学の具体的な展開は資本主義を止揚した社会主義経済の理論の中にこそある。こう考えることが経済学の正しい弁証法的な把握である。この見解は理論的に正しいばかりではなく、世界の現実がその正しさを実証している。だからこそ、現代は広義の経済学が論じられ、また広義の経済学史についても構想されるべき時代に入っているのである。このときに、経済学の原理としても、社会主義経済の原理への展開が見とおされないようでは、「過去と現在との対話」である歴史的認識が経済学について行なっているとはいふことができないのではなからうか。

しかし、宇野氏の見解には注目すべきところがなくもない。それはつぎにとり上げるひとびとの意見に関係があるのだが、経済学史が「独立の科学」でもなければ、また経済理論に従属する研究部門（例のサンミのツマ論）でもないとして、経済学史にたいして、オットリとかまえている態度である。科学における独立とか従属とかいうことが何を意味するのかは必ずしも明らかではないが、経済学がひとつの経験科学としての独立性をもつことが明らかになっていればそれでよいのであって、その内部の研究諸部門のあいだにみられる相互関係については厳密な

考察を加えることが大切であることはいうまでもないことながら、各部門の専攻者のあいだに協力の関係こそぞましく、独立の従属のというようなことでなわ張りあらそいのような議論をすることには、賛成できない。この意味から、宇野氏の上記の態度にはわたくしは賛成である。

第二には、「サシミのツマ論」をはじめて唱えた平瀬己之吉教授の考えについて短評を加えよう。平瀬氏は経済学史とは経済原論の補助科学だと主張され、「元来、学説史研究というものは、それ自身が目的なのではなくて、原理構築のための迂回生産のための手段であり中間生産物であろうと、私は思っている」と書いている。<sup>5)</sup> まず注意しておきたいが、平瀬氏のいわれる経済学史とは経済学説史ないし理論史であって、わたくしの考える経済学史の一部であり、先きにしめたところにしたがうていうと、(二)の(a)に近いものともいうことができる。しかし厳密にいうと、そうでもないのである。なぜならば、そこでの過去の学説についてのことは、上に補説の第一の中で論じておいたように、経済学の第一次の形成の中に入り混った、第二次の形成の中でのことばなのであって、第二次の形成そのものではないからである。平瀬氏には『剰余価値学説史』や『経済学批判』の準備過程のあいだに成ったノートの類が考えられているのかも知れないが、これらが本来の経済学史と趣を異にと考えられることは、すでにのべた。<sup>6)</sup> これらの叙述の構造について一言しておく、ここでは過去と現在とのあいだに正しい意味での対話——これであってこそ歴史研究といえること、以前に論じたとおりである——が行なわれてはいず、現在(すなわち研究者の理論的立場や理論)をば固定し、それに腰をすえて、過去(経済学史の対象)に立ちむかい、そこから支持を与えられ、優越をあげたい、脅威を感じ、あるいは闘争心を燃やす材料をえるなどをしているのである。対話のなかにはもとよりこのような要素もあるにしても、それだけではあるまい。いやしくも過去が一つの全体として現

在とあい対していると考えるならば、過去からの呼びかけをばそれ自体として受けとめる用意もなくてはならないだろう。つまり、ここには歴史意識が十分にはたらいっているとはいえないのである。だからここにいる経済学史のような叙述は、研究者の埋論にたいする論拠の史的回顧なのであって、本来の経済学史ではない。

それのみではない。ここに考えられている過去の経済学についての言葉が経済学にたいして価値があるといえるのは、この叙述を生んだ理論家が自分ですでに独創的な理論をば生産していること、少くとも生産の途上にあるということ、によつてのみである。理論家はすべからず、過去の経済学に論拠を求めるよりも先きに、みずからの社会的経験にもとづき、理論的構想力を駆使して、斬新な理論を打ちたてるか、それへの端初をつかむか、していなければならぬ。そのとき、本来の経済学史はその理論家に、何をひもどき何処に同じ論拠の先達を求めるべきかを教えるであろう、過去の何人がそれに異議をとなくてきたかをも、告げ知らせるであろう。かようにして、経済学史は理論の創造者に協力することをおしまないであろう。理論家は何よりもまず、理論家として必要な能力を十分に具えていなくてはならない。

第三に、遊部久蔵教授は、平瀬教授とは全く反対の立場に立とうとされるようである。『剰余価値学説史』が『資本論』の第一部の補巻であつて、本来の経済学史ではないといひ切り、経済学史が「経済学の歴史的、科学的」であるべきことを主張されることには、わたくしは全面的に賛成するのであるが、平瀬教授に反対のあまり、この研究部門に「独立科学」としての位置を確保したいとされる。このことに對しては、疑問をさしはさまないわけにはゆかない。経済学は全体として独立の一社会科学であるが、その内部の諸部門はいろいろな相互關係をもつものであり、その相互關係のあり方をつきとめることが問題でこそあれ、部門が相互に独立を主張し合つては、体系は実現

しないからである。わたくしが、宇野氏のオトリとした態度に賛成する所以である。

四番目に、時永淑教授の見解をたずねる。教授は一昨年の一月号の『経済志林』に「経済学史の研究方法について」と題する長大な論文をかつて、自身の見解を詳細にせめすと同時に、われわれに大きな刺激を与えた。その貢獻は大きかったというべきである。教授の立場は大体において、宇野氏のそれに等しいが、へだだりの要素がなくもない。教授の長大な論文に報いるために、少し長く論評することが儀礼になうてゐるであらう。

時永教授の考えの特徴は科学にたいする特殊な位置づけである。ここに特殊な位置づけというのは、科学が未熟な段階から発展するみちすがら、哲学や思想などとの融合状態から抜けでるわけだが、その際それからの「離脱」（時永氏のことば）ということに特別に注目し、その離脱の程度が同時に科学の完成度をせめすと、考えられていることを指す。たしかに経験科学としての経済学は、形而上学からの融合状態から抜け出して、自分に固有の原理の上に立つ姿勢をしめした。しかしこの「離脱」は、絶縁ではなかったし、またあるべきでもない。離脱は同時に関係の成立であり、離脱の程度がすすむことは、関係のふかまりと明瞭化をともなう。科学としての経済学が独立するに應じて、経済思想や経済哲学が内容を豊かにし、それらは三重の知識群として成り立ってゆく。しかし時永氏にはそんな関係は無用のようであつて、ただひたすらに、思想や哲学からの科学の離脱の過程が、経済学の歴史的展開について注目される。

離脱の過程は、氏においては、二つである。一つは上記の、思想や哲学からの科学の離脱。したがって、氏によると、経済学史におけるイデオロギー的な見方や思想史的研究は本来の研究の「準備過程」をなすにすぎない。この離脱をとげたのちに残る問題は「経済史的研究と経済理論との関係」であるが、この関係に着目して行なわれる

研究——この方法を教授は「段階論的構成方法」とよぶ——もまた經濟學史の準備作業の一つであるから、理論を經濟史からも「離脱」させねばならぬ。そしてこの第二の離脱を終えるとき、經濟學史は「經濟諸學說の歴史的地位の確定」という本来の課題をはたしうるものになるのである。そして學說の發展のおもむくところは一般法則の組織である「原理論」であるのだから、經濟學史とはつまりは「原理論」の成立史なのである。教授はこの學史の内容についても一言しておられるが、そこで考察される經濟學者はベティ・スミス・リカード9およびマルクスであり、われわれが予想するに困難でないような顔ぶれが學史の中にならぶのである。

さて時永教授の主張される科學あるいは理論の「離脱」とは、方法論的にどういう意味をもっているのか。たしかに經驗科學の理論は、その發展の過程において、いろいろの爽雜物からの「離脱」——教授の用いられる、同じ意味をもたせてある他の表現をもここにしろしておく、と、「解放」または「抽象」——という経過をたどる、そして概念的組織でもって相對的に獨立の地位を確保するのである。それにはうたがいない。けれども「離脱」は中空への飛行ではなく現實からの遊離でもない。理論は經濟的實在の構造をば概念的に反映する——上向運動——とともに、ふたたび現實に立ちかえって現實を動かす力となり、實在の中に入ってその發展的形成に役立つのでなければならぬ。そのことは理論が再び實在に「浸透」「帰着」するということではなくてはなるまい。このように考えると、「離脱」「抽象」の過程だけで理論をとらえ、「浸透」「帰着」の過程を考慮しない教授の經濟學觀は抽象的であることをまぬがれず、したがって教授の經濟學史は、わたくしの類型論における一部分——前記の(二)の(a)——に近いものであるということのほか、相當に大きい難点をもっていることになるであらう。この欠陥は、宇野氏の考えについて指摘したのと全く同じものである。

しかし、わたくしのみるところ、時永氏の考えには正しいと見られる点もある。氏は上記の論文の終りのところで、経済学の方法一般を「体系成立史的研究方法」と呼び、その方法を適用するときには、『資本論』そのものの「歴史的地位」を確定することも行なわねばならぬ、と書いている。氏がこのとき「成立史的方法」として、上記のような非歴史的な方法を考えていず、正しい意味で考えようとしておられるのであれば、『資本論』の理論が空中に浮遊せず、それ自体歴史の中に定着することになって、『資本論』にたいする正しい取扱い方となるであらう。しかしそれは、氏が従ってこられた宇野理論からの「離脱」を意味することになるのではなからうか。

さて、次には中村賢一郎氏におでまし願おう。氏の論文「経済学史の課題と方法」(『政経論叢』第三二卷一号)の中で氏の見解は明らかにしめされているが、氏の立場は、平瀬氏と同じく、経済学史を「理論経済学にたいする補助科学であって、原理・理論・法則・命題・定義などを構築し樹立するための迂回的手段にほかならぬ」というにある。<sup>(10)</sup> 氏の見解を読んで強く感じることは、氏には失礼ながら、歴史感覚とか歴史意識がとぼしそうだということである。氏は経済学史が「現在の立場」で研究せらるべきであると強調されるが、そしてこれは歴史研究一般についていえることで当然であるのだが、氏のいうところをきいてみると、経済学史が「過去の経済学」といいかえられているのに気づく。経済学史は、複種の過去の経済学をばその歴史的展開において把握するものであって、たんに過去の経済学といいかえられると、あるいはスミスを、あるいはリカードをとり上げて、その特殊理論を、たとえば賃金理論、たとえば地代論というようなものを取り出すばあい、その理論構造だけについてみると、特殊歴史的な諸条件とは関係なしに、特定の構造をもつものとして、とりあつかうことができる。そしてこんな態度は、それぞれにスミスやリカードの名を冠する必要もなく、Aの理論、Bの理論ととてもよいわけであって、歴史的存

在であつた経済学者と無關係に経済学をばあつかう。こういう態度は、全く非歴史的な理論的とりあつかいなのである。氏はこうも書いてゐる。「およそ実証的研究なるものは現代についていえることであつて、過去の史実に即した実証研究などは無意味である。現代の時点からの再検討ならばそれなりに現代経済学の完成のための歴史的補助作業として有意義であるが、歴史的相対主義的な確定のための研究などは学史のための学史研究にすぎなくなる。」と。このことばには、歴史的の研究にたいして無理解な人でないと一寸かけない勇敢さがある。このような人は、歴史といへば相対主義だ非理論的だときめてかかるか、史料集成という歴史の補助学科をしが考えないか、である。氏は理論の研究をなさる際に、論理のすじをたどらうとされる反面で現代の社会的経験に忠実であらうとされるのであれば——経験科学者としてこれは必須の条件である——、過去の事実<sup>(1)</sup>に忠実な実証研究にたいして、無意義であるなどといえるわけはあるまいと思ふのである。また経済学が歴史的な科学であつて、歴史的な科学であるという意味のもつとも深くつかみにくいものは、論理と歴史の差別性と同一性と<sup>(2)</sup>の統一の問題であるということに、氏は気づかれないのであるか。そこにある問題をひとつ取り出してみようなら、経済理論の論理的展開と歴史的な発展のあいだに特殊な關係があつて、その關係はひとつの歴史の論理を以てとらえるのでなければ明らかにならぬことになるのであるが、中村氏はこういう問題に気付かれないのであらうか。

こう考えると、歴史にたいして豊かな感覚をおもちでなさそうだと上にのべたけれども、社会科学の理論の構造についても、十分な認識をもつておられるのかどうか、疑問の余地がありそうに思えるのだ。

第六は故白杉庄一郎君の立場をとり上げたい。『経済学史概説』の上巻にはかれの立場が明示されているが、そこから注目すべき見解をとり出してみよう。第一に、白杉君は広義の経済学史への見通しをはっきりともつていた。

それは、狭義の経済学が広義の経済学の特殊な歴史的形態であることを明らかにすることが経済学史の主要眼目である、と考えられているからである。<sup>13)</sup> 狭義の経済学が経済学の特殊・歴史的な形態であるということができるのは、広義の経済学の立場に立っているからであり、また広義の経済学史の立場から狭義の経済学を歴史的に観察しているからである。広義の経済学史そのものが構想されたわけではないが、それへの見透しをもったという点でも、白杉君はわが国で最初の発言者であったのかも知れない。第二に、経済学史の認識が、過去の経済学の「過去の意義」と現在の意義との統一<sup>13)</sup>である、君は書いたが、これは意義ぶかくも解ける表現である。なぜなら、歴史的研究が「過去と現在との対話」だといわれるばあい、過去からの談りかけと現在からのうけ答えおよびその逆がおこなわれるわけであるが、その対話から、白杉君のこの規定が実現するだろうからである。しかしながら、厳密に考えると、白杉君の考えは、「統一」という概念に少し問題を残しているが、この点は第四においてとり上げる。

第三に、白杉君は賢明にも、経済学史に歴史的研究であるという自己限定を要求していた。歴史が現在に成立するものであり、過去の経済学は現在のわれわれの経済学なくしては理解せられるものでないという白杉君ではあったが、かといって、学史を理論研究の補助科学だといつてはしまわず、歴史研究そのものの中に固有の意義を求めようとした。「歴史は現在に成立する。我々自身の経済学なくして過去の経済学を現在我々が保持するか乃至は将来その建設を予想する経済学との関係において見るということは、単なる歴史的な理解を越える。問題は過去の意義の究明から現在の意義の究明に移ってゆくのである。」<sup>14)</sup> この表現は微妙なニュアンスをふくんでいるが、わたしは、現在の意義に重点をおいてみるばあいには、研究は歴史をこえて理論に移行するという意味に解したい。そこに経済学史の課題の限界が意識されていたと思うのだ。第四に、しかしこの限定にもかかわらず、あるいはその

限定の仕方そのものによつて規定されていふべきであらうと思うのだが、過去の意義と現在の意義との白杉式の「統一」にはギコチナサが残っていた。というのは、過去は一方でそれ自身の時代とのかかわりで「生かされる」のだが、他方では現在の立場からバサリと斬りおとされることが多いからである。たとえていうと、前の舞台では笑顔で迎えられていた役者が、舞台が暗転すると、こんどはにわかには冷遇されるというようなもので、観客のわれわれは事情の急変に面くらわざるをえない。このギコチナサの秘密は、舞台の暗転のなかにあるといわねばならず、暗転の構造は実は歴史認識の構造なのだが、白杉君を以てしても、この構造に不明な点があつたのであらう。

以上の感想を総括すると、白杉君は經濟学史の方法について優れた見解を保持していたといわねばならない。

七番目に内田義彦教授について語らう。氏の『經濟学史講義』（一九六一）の中にも、強力性に富んだ優れた見解が多くみられる。その若干を取り上げよう。

広義の經濟学史の概念を、白杉君よりも一そう明確に、保持していることが第一点である。ただしそれは将来に可能であるとされて、この書物においては狭義の經濟学がとりあつかわれる<sup>(14)</sup>。現段階の經濟学史の特色として、さきに指摘した対象における Warden の認識が必要であることが示めされていることが第二点である。内田教授は Warden のことを「移行」の語で表現しているが、この認識は貴重な価値をもっていると、わたくしは考える。しかしながら、そこで限定された規模においてでも、この種の Warden の認識ができていくかどうかといえ、そこには問題があるように思うのである。

内田教授の学史について語られるとき、研究方法が歴史的アプローチと理論的アプローチとの二つに分けて考えられようとしていることがその第三である。しかしいまのところこの点についていえることは、歴史的アプローチ

について理論的アプローチよりも精細に考えぬかれているということ、つぎにいつそう大切なことは、二つのアプローチの関係が不完全なままに放置されていることである。白杉君における、過去の意義と現在の意義との関係のギョチナサにも、それは似ているということができよう。<sup>(16)</sup>——このように批判的な評言ができる二つのアプローチではあるが、われわれは滋味ゆたかな表現にもであうのである。経済学史の目的が「経済そのものを学ぶための有効な迂回手段」であるとする内田教授は、理論的アプローチを無視しては、経済学史は歴史的アプローチがおりがちな歴史的相対主義に墮すると警告しているが、それは歴史主義の型の学史のおとし穴をよくつくとも、理論的アプローチばかりでも、自然主義の抽象におちいるのであって、問題は自然主義と歴史主義との総合であることを、はっきり意識していることをしめしている。<sup>(17)</sup>この項目についていまひとつ読者の注意を呼びおこしておくことをゆるしていただきたい。内田教授は歴史的アプローチを「理論が生まれてきたあとをその時代に即してたどること」、そして理論的なアプローチを「理論をヨリ発展した理論の水準で整理し検討すること」といいかえているのだが、この関係に似たことを、ヘーゲルは反省 Nachdenken の二つの意義としてとらえている。<sup>(18)</sup>この思考は、二つのアプローチの関係を観念論的に解こうとするばあいのひとつの仕方を暗示しているであろう。

さて、まだあとに相沢秀一教授、真実一男教授および木永茂喜教授などの意見があるが、重要な点についてだけ意見をかいておこう。

相沢教授は、わたくしと同じく、唯物史観によって研究する方法を提唱されてブルジョア経済学を批判するばあいに、対象と研究者との内に同質の資本主義という共同のあることを指摘される。その場においてわれわれと過去の学者とのあいだに對話が行なわれるとされるのであるが、これは正しい見解といえる。しかしこの立場から

は、広義の經濟学史がみちびき出されないのではない<sup>(19)</sup>か。

眞実教授の見解は「世界大百科事典」の中、みじかいが明澄な叙述においてみられる。氏は經濟学の歴史のおよび実践的性格を認められながらも、学史は理論の歴史を主にすべきことを主張される。そこで、經濟史的な基礎過程の研究と社会史的、政治史的研究はともに学史の準備作業とされ、そのあとで本来の学史研究がはじまる。そしてそこでは、理論の時論的研究と理論的検討との二つの課題があつて（内田教授の見解が採用されているのだ）、その研究方法は「追思考」だとされる。この方法はわたくしのもとで、歴史主義の研究手法が洗練されたばあいになつたものであつて、わたくしなら、歴史主義の類型に入れたいところである。しかし、眞実氏の立場にしたがつて考えると、歴史学派が經濟学史に十分な市民権をもつことができないのであつて、こういう結果と「追思考」とは結びつかなくなると思うのだが、どうであらうか。したがつて、眞実氏における学史は、杉本氏の第三の類型——くりかえすが、私見によれば、これは歴史主義の修正版である——に近いもので、批判の余地のあるものになるのではなからうか。

末永教授は、時永教授の見解に自分の意見を添えながら、自説をのべられた。しかし、氏の意見は、時永氏に近いと自分ではいわれながら、相当にへだたりがあるとみるのは、あやまりであらうか。末永氏には歴史主義の經濟学史に近いものが考えられているのではあるまいか。なお、『剰余価値学説史』が本来の学史ではなく、それは『資本論』第一部の一部に關する学史研究であると道破されたのは、氏の大きな功績であつた<sup>(20)</sup>。

さて、いちばん最後に、外国の人の見解を紹介しながら私見をのべて、本稿をおわることにしよう。ここに取り上げるのは東ドイツのフリッツ・ベーレンス Fritz Behrens の『政治經濟学史綱要』第一卷、ブルジョア古典学

派までの政治経済学』（一九六二）である。この学史の概説書は広義の経済学史のひとつの試作品であるから、意義のある出版であった。しかし、ベーレンスのこれまでの著述について一般的にいえるように、思考が一面的であって、器用な叙述が行なわれてはいるが、以前ほどではないにしろ、教条主義的な臭みを相当にもった書物だと思ふ。

これだけの総評をしておいて、要点にふれよう。まずベーレンスが広義の経済学をどう考えているかというところ、かれはエンゲルスの「最も広義の経済学」というものをそれとして理解しており、つまり、わたくしのいう抽象的、一般的な経済学を考えているのであって、その際、歴史的な社会体制の変動とともに形をかえるところの、経済学の具体的なあり方の総括をもその概念で考えられようとしているようである。<sup>(22)</sup>つまり、わたくしがいう具体的な一般性における経済学のあり方と抽象的一般性におけるそれとが区別されずに重なっているのである。この点は、エンゲルスにも責任があるといえようが、この程度の不十分な規定において広義の経済学が考えられていることにたいして、わたくしは失望せざるをえない。第二に、ベーレンスは「論理と歴史との統一」——これをかれは唯物論的原理と呼ぶのだが——という立場に立つから、ヘーゲルがそうであったように、経済学史とは経済学、それ自体にほかならないということになる。さまざまの経済学派の曲節に富んだ展開が、一個の経済学の自己展開における諸契機として統一的に把握できるというわけである。このたくましい論理の構えは、その内容を正しくつかまえないと歴史にたいする力づくのねじ伏せによる危険の多いものだけれども、そういう立場に立とうと努力しているものとして、わたくしはベーレンスに原則的に賛成である。もっともこの書物の中でベーレンスが「論理と歴史との統一」の立場を成功のうちに貫ぬいているかどうかは、別の問題であって、方法論の叙述にかぎって考えても、性急に論理と歴史との直接的な同一性を主張したいかにみうけられる。<sup>(23)</sup>東ドイツでは学界においてもソビエトの影響が

強大であるといわれるが、この辺りにもその傾向がみえるというべきであらうか。

第三に考えておくべきことは、ペーレンスが学説史の立場を承認しないということである。かれにしたがうと、この立場はブルジョア経済学の伝統に由来し、経済学をば外的表面的な現象から考察しているのであって、その本質、つまり社会の経済構造とその発展とからとらえるものではないからである。では正しい科学的な立場は何かというと、それは経済学体系または経済思想史の立場を考へてゐるようである。そこでは、「弁証法的唯物論という科学的方法」が採用され、対象は生産様式の発展に應じて区分せられ、その研究はブルジョアジーのイデオロギ―に對する闘争の武器と考へられねばならないとされる。この最後のこと——學問における党派性について注目すべきこととして、この科学における科学的伝統をまもりセクト主義を警戒するということ、および、自覺的な立場に立とうと努力するということ、この二つをペーレンスは説いてゐる。経済学史の研究が階級闘争の武器となるということは、科学研究の本質をば十分にわきまえた上での主張であるばあいには、傾聴すべきであらう。——以上のように、この書物にたいしていろいろと批評の余地はあつても、ともかくも、広義の経済学史がすでに試作の段階に入つてゐるということは明らかであるだらう。

なおひとつ、ポーランドのオスカー・ランゲの『経済学』（ポーランド語版の初版は一九五九年）の第一卷『一般問題』の中には、経済学史の展開がある。<sup>(26)</sup>この書もまた広義の経済学の試作品であるから、ここにみられる学史のとりあつかいについて考察すべきであるが、それは別の機会にゆづりたい。

(1) 宇野弘蔵『経済学の方法』（一九六三）八二ページ。

(2) 同書、八七ページ。

(3) ここでは宇野理論の一般的な批判がころざされてゐるのではない。ただ経済学史に關しての問題点をかぞへ上げてみたまで

である。

(4) 同書の八五ページにわれわれは読む。「独立の科学としての経済学史というのはどうだろう。そんなにきばらなくてもよいでしょう。しかしそれがサシミのツマというのはまた言い過ぎだ。」

(5) 平瀬巳之吉『経済学の古典と近代』（昭和二十九年）緒言。同民の意見は「商学論集」第二卷第二号の一五五―六ページや「経済評論」昭和二十九年四号の座談会「経済学の論理と人間の問題」の中にもみられる。

(6) 拙稿「経済学史の本質と類型」本誌本年二月号、一九六ページ。

(7) 拙稿「経済学史の現段階」本誌本年三月号、三二二ページ。

(8) 遊部久蔵『資本論研究史』昭和三十三年、一八二―一九一ページ参照。

(9) 時永淑「経済学史の研究方法について」（『経済志林』第三〇巻第一号）五七―六五ページ。経済史との結びつきからの「離脱」ということについて一言しておきたい。そこで注目してよいことは、経済史といっても、その内容はもっぱら「政策史」であるということである。ここでは経済史は政策史としてまとめられるのである。この仕方は、宇野理論における段階論のいちじるしい一つの特色といえる。この特色について考えるべきことは二つである。まず、経済史上の事実が政策の結果としてとりあつかわれようとしている点であって、経済についての觀念が現実の中に人りこんで生じた事実が注目されることは、前に論じたように、わが国の経済史ではあまりかえりみられなかったことであって、歓迎すべき態度である。しかし経済史的事実をば政策の成果としてだけ見ていては、経済生活における自然性についての理解に欠ける結果とならざるをえないのであって、経済史についての考察は、この態度からだけでは、尽くせないだろう。宇野理論の襟えからは、全体としての経済史が収まり切らぬという結果になるのであり、ここにも宇野理論の欠陥がある。なお、時永教授には近著『経済学史（第一分冊）』（一九六三）があつて、そこにも上の論文の主張のべられている。

(10) 中村賢一郎「経済学史の課題と方法」、『政経論叢』第三二卷第一号（一〇四ページ）。

(11) 同上、九〇ページ。

(12) 白杉庄一郎『経済学史概説』（上巻）一ページ。

(13) 同書、一五ページ。

(14) 内田義彦『経済学史講義』の九ページにいう。「現代は過渡期の時代といわれています。とくに、日本のような社会では、資本主義から社会主義への移行が一方で問題となっており、他方で封建制の解体がやはり何らかの形で問題とされています。そういう過渡期の問題を考えるためには、狭義の経済学、つまり資本主義の経済法則を明らかにする経済学でなく、その前後の、異なった社会体制のそれぞれの経済法則を明らかにする広義の経済学の知識が必要であり、そういう広義の経済学を対象とする広義の経済学史をつくり上げることも、将来は可能でしょう。しかし、われわれがいま対象とするのは、狭義の経済学、つまり資本主義の経済法則を明らかにする経済学の歴史であります」ここで将来の可能性としてしめされている広義の経済学史は、もうそろそろ実現へのはこびになってよいのではないのか。社会主義的計画経済へと経済が大きく転換をはじめてからすでに四十年になろうとしており、このあたらしい体制に入った国のかずも今ではずいぶん分ふえたのだから、経済学の体系はもとよりのこと、その第二次的形成において現われる経済学史もまた、装いをあたらしくすべき時期にきているであらう。

しかし、誤解のないようにいっておくが、広義の経済学史の段階に入ったからといって、狭義の経済学史がたちまち無用の長物になってしまうという訳ではない。それ自身も課題——資本主義経済の法則を明らかにすること——がまだ十分に果たされていない現状では、それはそれとして、科学としても実践にたいしても、意義をもっているのだ。

(15) 前の注に引用されたように、内田教授は対象を狭義の経済学史にかぎるのだが、そうしても、経済学史における重要な「移行」の認識は可能であると、いう。曰く「そういう限定をつけても、狭義の経済学、つまり資本主義の経済体制の分析には、封建制から資本主義への移行、資本主義から社会主義への移行の問題が、正面から、あるいは何らかのかたちでふくまれているのですから、その点への注意を怠らなければ、「移行」という特殊な問題状況をふまえた狭義の経済学の歴史を書くことができます」といいます。」「(同上、九ページ)。「移行」という特殊な問題状況」とかかれていますことに、わたくしは読者にむかって特別な注目を要請する。経済学史の対象が全体として「移行」あるいは Werdan の状況にあるというのだ。わたくしが、ウエーバーの方法論の批判として、抽象的なかたちで見とおした問題状況と内田教授のそれとは一致しているといつてよいだろう。

(16) 内田教授の歴史的アプローチは、細分されて、イデオロギイ史的、論争史的、時論的、発展史的の五種が指摘されているに對し、理論的アプローチに對しては、「資本主義理論のふかまりを軸にする」と説明されるのほかは、詳

しい内容の指示はない。そしてこの両者の関係が不十分にしかしめされていないことは、すでに真実教授の指摘するところである。曰く「〔時論〕と〔理論〕とのあいだに幾分断層めいたものを感じ」と（真実一男「リカード機械論の解釈」、『経済学雑誌』第四二巻第二号、一一一ページ以下）

- (17) つぎの句から、読者は自然主義と歴史主義との総合が現在の学史の課題であることの別の表現を窺取されたいものだ。「学史は理論を理解するための手段（だけ）ではないが、同時に過去の歴史を知る手段（だけ）でもない。資本主義そのものを理論的に分析するための迂路です。科学的経済学の発展史という軸を欠しては、学史は歴史的相対主義になります。そればかりか、外から裁断するという要素（出口いう、これは自然主義の特色である）なしでは、当時の歴史に内在するということ（出口いう、これは歴史主義の意図である）ということも、真の意味ではできません」（同上、一九ページ）

- (18) Hegel, *Enzyklopaedie, Vorwort zur zweiten Auflage*, *Lesson Auflage*, VII. 邦訳、岩波文庫版「小論理学」（上）二八ページ。

- (19) 相沢秀一「経済学史の方法」（『経済学雑誌』（福井先生還暦記念号）第四二巻第四・五号）一一一四ページ。

- (20) 真実一男「経済学説史」（『世界大百科事典』第九巻九四一七ページ。内田教授についてのべた終りのところで、ヘーゲルが *Nachdenken* について二重の意義のあることをのべ、それが学史の研究にもある意義をもちうると、語った。歴史主義が認識の構造として主張するのは、そしてわたくしの理解では真実氏のいわれる「追思考」がそうだと思うのだが、その第一のものなのであって、それだけでは相対主義の批評をまぬがれることはできなくなるのである。

- (21) 末永茂喜「経済学史について」（『東北大学研究年報』『経済学』六六・六七）二四一五二ページ。

- (22) Vgl. Fritz Behrens, *Grundriss der Geschichte der politischen Oekonomie*, Bd. I., *Die Politische Oekonomie bis zur bürgerlichen Klassik*, 1962 SS. 7-11.

- (23) Vgl. *ibid.* SS. 14-5. 歴史と論理との統一というのは、直接的な同一性のことではありえない。実は歴史的経過と論理的発展との差別の側面と同一の側面との矛盾的自己同一であるのでなくてはならぬ。そこにある統一はつねに二重の意味での統一なのである。ペーレンスはこの二重性について論理的な理解をもっていないようである。なおわたくしが経済学史の類型として、自然主義、歴史主義、および社会主義の順序を考えると、そして杉本氏の説に反対するとき、歴史と論理との統一とい

う論理が働いている。そして経済学の方法の展開はすなわち経済学史の方法の展開となると考えて、上の主張をおこなっているのである。念のために書きそえておく。

24) *ibid.*, S. 19. ソビエトでもそうであるらしいが、ここにいう「科学的」というのは、虚偽の意識の上に立つイデオロギー的  
とらえごとではなくして、真実の意識の上に立つ、学問的に正しいという意味であろう。

25) *ibid.*, S. 19-23.

26) わたくしは最近出版された英訳によつてはじめてこの書物を接することができた。O. Lange, *Political Economy*, Vol. I, *General Problems*, Translated from Polish by A. H. Walker, 1963.